

## 令和6年度いーたいけんアワード(青少年の体験活動推進企業表彰) 〈審査結果〉

### 【表彰の概要】

この表彰は、社会貢献活動の一環として青少年の体験活動に関する優れた取組を行っている企業を表彰し、全国に広く紹介することにより、青少年の体験活動の機会の推進を図ることを目的としています。

### 【審査及び受賞企業決定の流れ】

応募いただいた64件(大企業43件、中小企業21件)の中から、審査委員会による審査のうえ、特に優れた取組を行った上位10件の企業を最終審査進出企業として決定しました。また、今後の取組に期待ができる企業を奨励賞とし、中でも特定の観点で優れた取組を行った企業を特別賞(※)として決定しました。

令和7年1月17日(金曜日)に行った最終審査(プレゼンテーション審査)において、最優秀賞である文部科学大臣賞(大企業1件、中小企業1件)並びに優秀賞(大企業部門:5件、中小企業部門:3件)を決定しました。

### ※特別賞について

#### ○スペシャルニーズ賞

特別な支援や配慮を要する青少年(障害・不登校・特異な才能・日本語指導等)のための取組や、特別な支援や配慮について理解を深めるための取組のうち、顕著な取組

#### ○連携賞

青少年教育団体等と企画段階から密に連携して行った取組のうち、顕著な取組

### 【受賞企業】

#### ■文部科学大臣賞(2企業)

大企業部門:ALSOK(総合警備保障株式会社) / 中小企業部門:株式会社三和製作所

#### ■優秀賞(8企業)

アクセンチュア株式会社、インパクトジャパン株式会社、株式会社クボタ、株式会社毛髪クリニックリーブ21、サントリーホールディングス株式会社、清水建設株式会社、大和ハウス工業株式会社、常盤工業株式会社

#### ■特別賞(スペシャルニーズ賞)

井関産業株式会社

#### ■特別賞(連携賞)

ライオン株式会社

#### ■奨励賞(14企業)

NECネットエスアイ株式会社、株式会社阿部長商店 南三陸ホテル観洋、株式会社三和製作所、株式会社DACホールディングス、株式会社中日新聞社、株式会社TBSホールディングス、株式会社デンソー、株式会社阪急阪神百貨店、株式会社日立システムズ、株式会社日吉、株式会社三越伊勢丹ホールディングス、J-POWER(電源開発株式会社)、セイコーグループ株式会社、ソニー生命保険株式会社

### 【審査委員】(50音順)

- 明石 要一 氏(千葉大学名誉教授)
- 笹谷 秀光 氏(千葉商科大学 客員教授)
- 中西 直樹 氏(管清工業株式会社 管理本部総務部長)
- 野口 和行 氏(慶応義塾大学 教授)
- 野村 秀樹 氏(森ビル株式会社 特任執行役員・広報室長)
- 松田 恵示 氏(独立行政法人国立青少年教育振興機構 理事)
- 山本 瑞穂 氏(特定非営利活動法人教育支援協会 理事)

## 今日的な課題を意識しよう

文部科学省が「青少年の体験活動推進企業表彰」を行ってきて11年がたつ。今回も多くの企業がエントリーしてくれた。64件である（大企業43件、中小企業21件）。うれしい限りである。

書類審査を経て令和6年12月に、最終審査に進出する上位10件と特別賞2件、奨励賞14件を決定した。上位10件は1月17日、国立オリンピック記念青少年総合センターでプレゼンを行った。



文部科学大臣賞は、大企業部門ではALSOKの「あんしん教室®」、中小企業では三和製作所の「ハートブリッジプロジェクト～想いの架け橋／子どもたちの「できた！」を応援～」が選ばれた。

ALSOKは防犯・防災・救命に関する活動を20年間という長期にわたって活動してきている。守りのプロであるガードマンを学校に派遣し「自他の生命を守ること」の出前授業を行っている。その中で子供の発達に応じた防犯教育が高く評価された。例えば、低学年には「安心して登校」、中学年では「安心して留守番」、高学年では「安全な街って何だろう」というコンテンツを用意している。また、今日的な課題であるインターネットの危険性についての学びも用意している。

三和製作所は特別支援教育に特化した活動を行っている。学校や家庭でない会社のスペースに制作した特別支援教材を100点も用意している。ここでは子供たちが遊ぶだけでなく、特別支援教育関連の教師の研修の場にもなっている。子供たちは豊富な教材の中から好きなものを選び「できた」という達成感を味わっている。参加者から新しい地域のプラットフォームという評価を受けている。特別支援教育に関する教材や教具は乏しい。その中で特別支援学校と連携しながら教材・教具を開発し、提供していることが高く評価された。

サントリーの「次世代環境教育「水育」～未来に水を引きつぐために～」も高く評価された。ここも第1回から参加している老舗である。もう少しというところである。新たな付加価値を示してくれることを期待したい。中小企業の毛髪クリニックリーブ21の「ヘチマプロジェクトで海の豊かさを守ろう！」も高く評価された。環境問題に「ヘチマ」を使ったユニークな視点から取り組み、ヘチマたわしの販売収益を日本赤十字社や動物園に寄付している。ストーリーがある。

多くの企業が毎年参加してくれている。うれしいことである。願いは、これまでの活動に新たに何を付け加えたか、そのことで子供と会社、それから地域などがどう変わったか、などの記述が欲しい。

## ポスト SDGs 「質の高い教育」としての体験活動表彰

本表彰制度は、設立から12年目になり2回目から審査委員をしていますが、その歴史を企業の視点で見ると、まず2010年のISO 26000（社会的責任の手引き）による「本業を通じた企業のCSR」や2011年にマイケル・ポーター等が提唱した「共有価値の創造（CSV）」の浸透がありました。そして2015年には国連でのSDGs（持続可能な開発目標）の策定を受け企業でも積極的にSDGsを経営に取り入れています。さらには投資家を中心にESG（環境、社会、企業統治）の要請がこれを後押ししています。これらを総合した「サステナビリティ」（持続可能性）は経営の中核になっています。



サステナビリティとは、「地球のため、人のため、自分のため、そして未来の子孫のため」という意味です。重要なのは世代を超えた視点です。活動が、将来の世代、孫子の代から見ても誇れるものであるかどうか。それを問う価値観が、サステナビリティで、まさに将来世代の青少年の育成が重要な視点です。

私の専門であるSDGsでは、目標4に関連しますが、単なる教育ではなく「質の高い教育(Quality Education)」であることが重要です。特にターゲット（具体的目標）「4.7」に「持続可能な開発のための教育」（ESD：Education for Sustainable Development）が規定されています。ESDでは実体験でしっかり学ぶ「体験活動」に焦点が当たります。体験型の教育活動は、社会課題と向き合う学びの場として大きな意義を持っています。

表彰制度におけるもう一つの重要な視点は、企業が本業を活用して戦略的に組み込むことです。企業の活動はISO 26000ができる前の「寄付型」や「慈善活動型」から、「事業を通じた社会課題の解決」に進化してきました。これにより継続性を確保した活動にできます。また、企業経営では「人的資本経営」が重視されており、本制度は、青少年の教育効果だけでなく、従業員のスキルアップやモチベーション向上という側面からも大きな効果を発揮しています。

達成年度が2030であるSDGsについては、いよいよ年次以降の「ポストSDGs」の動きが本格化しました。2024年9月の国連での未来サミットで、2027年からポストSDGsに向けた検討を開始するとされましたので、今から日本提案をまとめていく必要があります。教育分野も重要な事項ですので、本表彰制度の優良事例がポストSDGsに向け有力な「玉」となっていくことが期待されます。今後もこの制度により、青少年が持続可能な未来を見据えリーダーとして成長する体験の場を企業が提供していくことが、ポストSDGs時代の鍵となります。

## 青少年が夢や希望を持てる国、日本

昨年、弊社が中小企業部門において文部科学大臣賞を頂いたご縁で審査委員をさせて頂きました。両親が教員の家庭で育った私ですが、大学を卒業し金融機関に就職してからは日々目先の業務に追われ、青少年の体験活動とは無縁の生活をしていました。数年前現在の会社に転職し、青少年の体験活動を社会貢献活動として当然のように行っているのを見てからは、自分も何か社会のお役に立ちたいと考えていたところでした。今回このような機会を頂き、学識経験者や専門家の皆様と活動できたことは、私自身にとりまして大変貴重な経験となりました。厚く御礼申し上げます。



さて、今回も多数の企業が参加され、どの企業も素晴らしい取り組みを行っていました。そのなかで文部科学大臣賞を受賞されました ALSOK（総合警備保障株式会社）と株式会社三和製作所の取り組みにつきましてコメントさせて頂きます。

ALSOK は全国の小学校へ出向き、防犯・防災対策を教える出前授業をされています。特筆すべきは参加者数で、令和5年度は72,535人の小学生が参加していました。施設を造る為に相応の資金投下をすることが困難な企業でもアイデア次第では取り組めるという、中小企業にも参考になる取り組みだと思えます。また、若者がちょっとしたきっかけで被害者のみならず加害者にもなり得るインターネット教育にも取り組まれているのは、今日の社会情勢を鑑みると大変意義のある取り組みだと感じました。

株式会社三和製作所の取り組みは、特別支援学校や特別支援学級の子供たち、関係者に自社スペースを開放し、準備した約100点の教材教具を提供し、障がい児の「できた」という達成感や自己肯定感を醸成するプロジェクトです。障がい児の達成感や自己肯定感が醸成されることを目指していますが、チャレンジする障がい児の表情を見て、寄り添っている親や関係者も笑顔になっているとお聞きし胸にささるものがありました。ぜひ今後も取り組みを拡大して欲しいと思います。

学校現場では先生方が忙しい中、子供たちの為に奮闘されている様子が、私自身の子供や新聞、ニュース等を通じて伝わってきます。我々企業も長期間に渡る体験活動の提供を通じ「青少年が夢や希望を持てる国、日本」を目指し努力して参りたいと思います。

## 熱を持ってホンモノを伝える

文部科学大臣賞を受賞された ALSOK（総合警備保障株式会社）、株式会社三和製作所をはじめ、優秀賞を受賞された 8 社、特別賞を受賞された 2 社、奨励賞を受賞された 14 社の企業の皆様に心よりお祝いを申し上げます。また、今回エントリーしてくださった大企業部門 43 社、中小企業部門 21 社の皆様に、青少年の自然体験活動に携わる一員として、深く感謝申し上げます。



「いーたいけんアワード」の審査にあたっては、各企業からの応募様式について、社会貢献の取り組み、教育的配慮、本業との関連性、地域社会やステークホルダーとの関連性、社内理解への配慮、新規性・発展性の観点から各審査委員が審査をします。最終プレゼンテーションに残った企業の皆様のプレゼンテーションはどれも非常に素晴らしく、それぞれの「推し」について審査委員の間で白熱した議論がかわされました。その議論の中で、ますます高度化・複雑化していく社会の中で、正解のない社会課題について取り組んでいること、本業の強みを活かし、関連性が高いこと、担当者の皆様を中心に、周囲を巻き込みながら実施しているところが高い評価を受けたと思います。

また、審査の中で、改めて「いーたいけん」とは何かを捉え直すことについても意見がかわされました。今回のエントリーを通して、企業による体験活動の提供は、フィールドにおけるリアルな体験、社内や関連の施設を活用した場作り、社内の人材を活用した教育現場への人材派遣に大きく分けられることが確認できました。企業の CSR 活動として体験活動を提供する時に、今日的な社会課題を企業の皆様がどう捉え、それをどのようにわかりやすく噛み砕き、企業の強みや人材を活かして、体験活動プログラムとして提供するか、地域、学校、青少年団体、行政、そして企業の皆様と一緒に考えていく機会として、このアワードの場が重要であることを改めて強く感じることができました。

そして、プレゼンテーション発表、ポスター発表は、皆様の取り組みをリアルに感じることができる貴重な場所でした。これらの発表を聞きながら、皆様の「熱を持ってホンモノを伝える」姿勢を強く感じることができました。この「熱の伝え合い」が、それぞれの取り組みに対するさらなる熱を生み出す場所になり得ることも確認することができました。熱を発しているものに触れることで、その熱は伝わりやすくなります。そのために、青少年の健全育成に携わる「チームいーたいけん」を作り上げるための場作りと仕組みづくりが次に目指すべき山なのだと考えています。

## 本業へのつながりが生む真の学び

弊社は前回（令和5年度）の文部科学大臣賞受賞企業ということで、今回初めて審査委員という立場で参加させていただきました。一連の審査を通じて、応募書類から伝わる企業の皆さまの想いや熱意、様々な工夫が凝らされた素晴らしい取組みの数々に触れ、また、審査委員の皆さまの真剣かつ建設的な議論、何より青少年教育に対する想い、企業に対する期待を肌で感じ、改めて本表彰の意義、重みを感じる、大変貴重な機会となりました。



審査の過程で、私が評価ポイントとして特に注目したのは、「本業との関連性」ならびに「新規性・発展性」でした。まず、「本業との関連性」については、本業に密接に関連し、本業そのものの充実につながるからこそ、企業として本気で取り組むことができる。そして、だからこそ、子どもたちにとって真に意義ある深い学び、体験を提供できるはずだと考えるからです。また、「新規性・発展性」については、常によりよいプログラムへと昇華させるための工夫、チャレンジする姿勢はもちろん、例えば、一企業の枠組みを超えて、他企業や行政、学校やNPO法人、メディアなど、様々なステークホルダーを巻き込んだ座組には、大きな発展性を感じます。

最終審査・プレゼンテーションに進まれた企業の取組みはいずれも秀逸で、甲乙つけ難く、審査も拮抗しましたが、ALSOK（総合警備保障株式会社）様は、まさに本業そのものである「防犯、防災、救命」をテーマに、極めて実践的な内容で、対象学年に合わせたきめ細かなプログラム構成、さらには20年もの継続性、全国展開という規模感、企業としての姿勢、本気度を強く感じさせるものでした。また、株式会社三和製作所様は、自社で取り扱う特別支援教材を活用し、子どもたちの発達や成長をうながすだけでなく、先生方と連携して新製品の開発につなげるという本業との関連性や、「ハートブリッジプロジェクト」との名のもとに、地域に開かれたプラットホームを目指す取組みが高く評価されました。

弊社（ヒルズ街育プロジェクト）は、本表彰に参加を続けるなかで、他の企業の皆さまの素晴らしい取組みを参考に進化を重ねてきましたが、今回も大きな刺激をいただき、プロジェクトのさらなる充実に向けて、決意を新たにしました。改めて感謝をお伝えしつつ、今後とも、未来を担う子どもたちのために、ひいては日本の未来のために、本表彰の益々の発展とともに、本表彰を通じた企業の取組みの深化、広がりを心から願っております。

## 企業と子どもたちとの出会いの面白さ

「面白い」という感情は、現代社会において山積する課題を解決する際のキーワードになっているように感じています。

「令和6年度いーたいけんアワード」で提供されていた取り組みは、そのほとんどが本当に「面白い」ものでした。その度合いの違いが、表彰に繋がっただけ。そんなふうに思います。

「面白い」という言葉は、「面」が「白い」と書きますが、例えばトンネルの出口に来た時に「パッ」と光がさして、顔全体が明るくなる。そんな時の趣きに関連している心情でもあるのだと思います。だとすれば、それは知らなかったことや初めてのことに「出会う」とか、これまでそれが当たり前と思っていたことが「違っていたんだ!」と気づくとか、なんらかの驚きと変化がそこに横たわっているのだと思います。

「いーたいけんアワード」では、企業の皆様が、子どもたちや子どもたちを支える大人の人にも、こうした驚きを与えるものだからこそ、社会的な価値の創造につながって、あるいはその意味では企業と子どもたちとの出会いの「面白さ」が、取り組みのエネルギーとなり活動自体を支えるものになっているのではないかと思います。

もちろん、どの規模で取り組まれたのか、どのようなニーズを満たすことができたのかなど、気にしてしまうことも多々あると思います。ただ、そもそもの「面白い」に満たされた取り組みでなければ、子どもと社会と、そして未来をつなぐものにはならないし、取り組みの意味も希薄になってしまうのだと思います。

そして、これは取り組んでいる企業の一人一人の皆様が、「面白い」と夢中になっていることが、その全体を決め出しているのではとも感じました。こうしたいくつもの出会いと面白さの度合いが、今年はずっと、表彰を受けた企業の皆様の取り組みで大きかったということだと思います。

引き続き、子供との出会い話、そして面白さが持つ楽しさを皆様にお伝えいただけましたら幸いです。



## 次世代を担う子供たちへ持続可能な循環型社会を

この度、いーたいけんアワードにはじめて審査員として参加させていただき大変刺激を受けました。何よりもご参加いただいた企業の皆さまへ深い感謝と敬意を表します。そして受賞された企業の皆さま、心よりお祝い申し上げます。



次世代を担う子供たちのために多くの企業が教育 CSR 活動に力を入れ、自社の強みをいかした優れた取り組みがたくさんありました。特に、文部科学大臣賞を受賞された ALSOK は年齢に応じたプログラムを令和 5 年度全国でのべ 20,440 回実施されているということに驚きました。この回数にはインパクトがあり高い評価に繋がりました。加えて、今まさに必要とされる課題「インターネット」や「防災」などの授業を追加し毎年カリキュラムを充実させている点も大きな成果を挙げられている要因だと思います。また、株式会社三和製作所は自社事務所スペースの一角を開放し、サードプレイスとしての役割を果たされていました。この取り組みは、子供たちへ体験を提供するだけに留まらず、地域社会への持続可能な影響を考慮したものであることが印象的でした。地元市川市では、特別支援関連教員との連携や退職後の教員を顧問に採用するなど、ステークホルダーとの関係性が構築され、新たな居場所として地域社会に大きく貢献していることが分かりました。

さらに、両社とも社員の皆様の積極的な参加とコミットメントは、社会貢献活動が企業文化として根付いている証拠だと感じました。

NPO 法人の活動として常に意識することは、地域と連携し巻き込んでいく、ということです。ただサービスを提供するのではなく、課題を共有し共に考え解決の道を探すことで、多くの方が当事者意識をもって主体的に関わり、コミュニティが形成されることにより、その活動が持続可能なものとなります。

今回ご参加いただいた企業の多くが持続可能な循環型社会を意識した活動でありました。様々な「いーたいけん」をした子供たちが「社会を生き抜く力」を持ち、よりよい社会を創造していくために、教育 SCR 活動は重要な一翼を担っていると思います。これから益々、活動が広がっていくことを期待しています。

皆様のさらなるご発展とご活躍を心よりお祈り申し上げます。